雲夢沢幻視

上田　信

「これがアメリカの人工衛星から撮影された中国大洪水の模様です」という淡々としたアナウンサーの声にはっとして、作業の手を止めて視線を上げたところ、テレビの画面に長江中流域の衛星写真が映し出されていた。武漢の近く、特に長江の南側に、それは黒く広がっていた。土手を決壊させ、村落を飲み込み、数千万もの人々の生活を破壊しているに違いないその水面を見て、あれは雲夢沢じゃないか、と口をついて声が出た。

雲夢沢は春秋戦国時代の大国・楚を、経済的に支えた大湿原である。前漢の時代の雲夢沢の姿を、司馬相如（前一七九～一一八年）が賦という文学の形式で描き切っている。多種多様な香草が茂り、菖蒲や芙蓉に彩られ、水面下には巨大な亀が泳いでいる。「その北には則ち陰林・巨樹があり、タブノキにクスノキ、ニッケイにサンショウが見られる」と相如はいう（「子虚賦」、朱一清・孫以昭校注『司馬相如集校注』人民文学出版社、一九九六年）。「陰林」とは山の北側の樹林だという説もあるが、鬱蒼として林床が暗い照葉樹林の森を私は想い描きたい。

史苑（第五九巻一号）

長江上流の四川、中流の湖北・湖南には、当時、豊かな森林が広がっていた。そこからしみ出す水流は、大雨のときにも溢れることなく、日照りのときにも涸れることがなかった。雲夢沢は安定し、豊富な物産の恵みを、楚の国の人々にもたらしていた。時代が下る。人々は森を開墾し、湖を干拓した。特に近年、その速度は早まるばかり。中国の人口の三割もの人が住む長江流域（一八〇平方キロメートル）において、この三〇年間に森林は半減し、いまでは僅かに全面積の一〇パーセントを占めるのみだという（『朝日新聞』一九九八年九月六日）。

この夏に中国で史料収集をして来た友人の一人は、テレビで報道される洪水の情報に目を配ってきた。これまでは洪水などが起きても、自然災害に立ち向かう人民解放軍の姿などが映し出されるだけで、その背景を説明することはなかった。ところが、この夏の報道は少し違っていたという。もちろん兵士らの英雄的な奮闘ぶりの紹介がニュースの中心を占めてはいるものの、長江上流域における森林破壊が深刻なことも繰り返し紹介され、洪水の原因だとは決めつけてはいないものの、洪水の被害を拡大させた重大な要因として解決の必要性が論じられた、とのこと。

中国における森林破壊は、一つの国の問題にとどまらず、すなわち地球の環境問題でもある。ユーラシア大陸全域で進む砂漠化の東の最前線が中国にある。日本の人口を超える二億数千万の人々（東北の松花江流域の被災者も含む）が洪水の被害を受け、避難しようにも受け入れ先もなく、水に浸かった家に住み続け、夜は屋根の上でまどろみ、昼は水死した家畜が放つ腐臭のなかで滞りがちな支援物資を待っている。

「だから三峡ダムの建設をしなければならないのだ」と中国政府の要人は胸を張る。このダムは孫文の

夢。しかし、全会一致があたりまえであった人民代表大会において、かなりの数の反対票が投じられた建設計画でもある。水没地域からは百数十万もの住民が追い立てられる。大量の土砂が、ダム湖の上流部に位置する重慶近辺に堆積すると予測されている。ダム湖の底に土砂を抜く排出口を造ったとしても、いずれ機能しなくなる。ダムは長江流域のエコロジカルなまとまりを分断する。ダムが流域の環境に与える影響は、いまだに解明し尽くされてはいない。

人は死に臨んだとき、一生の経験をフラッシュバックすると聞いたことがある。衛星写真に映し出された水面は、長江流域の大地がその生命を失う直前に、二千数百年もの時間を飛び越えて見た夢だったのではないか。そこに見たものは、湖畔には香草もなく樹林もなく、空には鳳や鸞の影もなく、地には白虎や玄豹の姿もない、変わり果てた光景であったはずだ。一説によると雲夢沢は長江を挟んで広がる二つの湿地帯を、合わせて呼んだ名だという。北を「雲」、そして南は「夢」と呼ぶ。その「夢」とは何であったのか、生態学的歴史学なるものを暗中模索しながら、私は問いかけて行きたい。

（立教大学教授）